

序

平成8年、第1期科学技術基本計画のなかで「ポストドクター等1万人支援計画」が謳われてから13年が経過した。科学研究者を目指す者が、いわゆるポスドクというキャリアを通過する例は格段に増加したと思われる。その一方、国立大学法人を人件費削減の波が容赦なく攻め立てている。

この劇的な変化のなかで、同じ世界にいるはずの先輩たちの事例がそっくりそのまま自分には当てはまるはずがないと感じることも多い。日々多忙な研究生活のなかで得られる情報量には限りがある。さて、自分は今こうしてコツコツ研究をやっているだけで果たしてよいのだろうか、などと不安に駆られることもあるだろう。いや、インターネット上に飛び交うさまざまな情報こそが大学院生や若手研究者の不安を駆り立てているとも思える。

本書は、そのような若い人たちのために少しでもお役に立ちたいと願っている著者と編集者の思いを形にしたものである。現状とその問題点をよく知り、また先輩方の考え方、やり方を参考にして自分なりの解答を見つけていただきたい。本文中にも書いたが、重要なことは不安によって萎縮してしまわないこと、不安要因を取り除くために前向きな努力をすることだと思う。

博士号を取得すること自体、読者の皆様にとっては大変なことではないかもしれない。ただ、実際に取得する前に、そもそも博士号とは何なのか、博士号を取得した場合としない場合とにどんな違いがあるのだろうか、自分の人生に博士号は必要なのだろうか、といったことをじっくり考える必要はあるだろう。それは、「博士」としてどんなふう生きていくのかを確認する作業でもある。

本書の発刊にあたり、お忙しい時間をやりくりしてインタビューに応じてくださった方々、貴重な情報を提供してくださった方々、及び著者の所属企業・機関においてご指導いただいた方々への深い感謝の念でいっぱいである。また、本書を世に問うにあたり羊土社とご担当者には多大なご協力をいただいた。これらの方々は皆、著者同様、若い人たちの役に立ちたいと考え、ご協力いただいたことをここに記したい。

本書が、皆様にとってよりよい選択をする一助になれば幸いである。

2009年2月

著者を代表して
三浦有紀子